宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第 14 回
第４章　宮川ひろ
その３　『「へてか へねかめ」おふろでね』（後半）

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまんきみこさんのことを書いた。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書いたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）のころまでを述べている。

第４章では、宮川ひろ（1923～2018 年）のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返る。母もまた、私の出会った児童文学者にほかならなかった。

さいごのおくりもの

2018（平成 30）年暮れに母宮川ひろが亡くなったあと、19 年２月に、画家のましませつこさんの「ラフ」が上がった。母が絵本のテキストを書き残した「へてか へねかめ　３かいね」の「ラフ」である。童心社編集部の永牟田律子さんと私は、ましまさんのお宅におじゃまして、その「ラフ」をめぐって、午後いっぱい、いろいろな話をした。そのあとのスケジュールの確認もした。ましまさんと永牟田さんは、着々と仕事をすすめてくださった。そのなかで、絵本のタイトルを『「へてか へねかめ」おふろでね』とすることになった。

「へてか　へねかめ　かめかめ　かめか　かめの　おのたま　おちょりこ　ちょりこ……」――絵本のなかで、そうたとおじいちゃんが、呪文のようなことばを３回繰り返して、おふろであたたまる。

ふしぎなとなえことばのことは、母のエッセイ「「へてか　へねかめ」三回ね」（『教育新聞』1985 年 2 月 28 日）に書かれている。「へてか　へねかめ……」は、母の友人のお宅に代々伝えられたものだという。「子どものときに、毎日となえて、もらいこんできたことばは、あしたをいい日にする力をわきたたせてくれるのだと思う。」（引用は宮川ひろ『母からゆずられた前かけ』文溪堂 1993 年よる）――エッセイは、そうしめくくられる。

ましませつこさんの絵で絵本が出ることに決まってから、母は、しばしば、私に「『へてか　へねかめ』どうなった？」とたずねた。老人ホームの部屋で、母は、30 年あまりも前に出会ったことばを思い出して、はげましにしていたのかもしれない。

亡くなった母にかわって、私が絵本の本文の校正をした。新宿の喫茶店で、永牟田さんから色校正を見せてもらったりもした。お店のテーブルに、ましまさんのみごとな絵が広がった。私は、絵本の制作に直接かかわるのははじめてで、色校正を見るのもはじめてだった。

『「へてか　へねかめ」おふろでね』は、2019 年 10 月 20 日の奥付で無事に刊行された。本の帯には、「児童文学作家　宮川ひろ　さいごのおくりもの　新作」と記されていた。

もう、母の一周忌が近づいていた。私は、一周忌の法要よりも、遺作になった絵本の出版記念会がやりたかった。童心社がその意をくんでくださって、「宮川ひろ作・ましま せつこ 絵『「へてか　へねかめ」おふろでね』の出版を祝う会」を催すことになった。会の発起人は、あまんきみこさんと藤田のぼるさん。藤田さんは、

私が 19 歳で児童文学批評の勉強をはじめたころからの５歳年上の仲間で評論家・作家、母とも親しくしてくださった。長く日本児童文学者協会の事務局長をつとめ、現在は理事長だ。童心社も、発起人になってくださった。

「出版を祝う会」は、12 月８日の日曜日の午後に行われた。会場は、かつて、母に「へてか　へねかめ……」の話を聞かせてくださった M さん（故人）のむすこさんがオーナーシェフをつとめる都内のレストランだ。（注１）ましませつこさんを囲む会になった。あつまってくださったのは、母と近しかった作家、画家、編集者、新しいこの絵本を広めてくだりそうな方にも来ていただいた。私たち家族も、母の遺影をもって参加した。出席は、30 名ほどだった。

階段の下の段ボール箱

2022（令和４）年２月 19 日、昼ごろ、家のなかで、ちょっとスペースを空ける必要があって片づけていた。１階から２階にあがる階段の下に古い段ボール箱があったのを引っぱり出してみた。

出してみると、赤いマジックインキでやや大きく、もうすすけた字で「1-1 資料」と書かれている。これは、母の字で、1985（昭和 60）年に、それまで長く暮らした東京都板橋区の家から、いまの家に引っこしたときの荷物の一つと思われる。開けてみると、いくつかのものが入っていたが、おもなものは、つぎの二つだ。

① 母の未発表原稿「春駒」の最終部。B4 判・400 字づめ原稿用紙全 49 枚。
原稿は、まったく裸で、とじられてもいない。ほかのもののあいだに、ただ、はさまっていた。

② 『夜のかげぼうし』（講談社 1978 年）、『東京へ帰る日まで』（同前 1985 年）の先駆稿と思われるもの。全 296 ページ（ページは 400 字づめ原稿用紙の片面ずつにふられている）。
きちんと紐で綴じられているが、表紙はなく、タイトルも不明である。
教師として経験した静岡の学童疎開、秋田への再疎開についてつづられている。
記録ではあるが、少し会話文などもあり、いくらか小説ふうである。
いつ書いたのか、わからないが、作家デビュー前であることは確かだと思われる。①の「春駒」より物語性が少ないことから、「春駒」より前かもしれない。

まず、①についてだが、これは、前回も引いた、宮川健郎編「宮川ひろ年譜」（未発表）の 1952 年、53 年の記述にかかわっている。

1952（昭和 27）年　29 歳
（前略）
12 月、光文社から壷井栄の『二十四の瞳』刊行。新聞広告で見て、池袋の新栄堂書店で買いもとめる。作中の岬の分校と自分がそだった山の分校がかさなってくるようで、深い感動をおぼえる。
1953（昭和 28）年　30 歳
『二十四の瞳』をくりかえし読む。自分のそだった村を舞台とする「春駒」約 200 枚を書く。夏、壷井栄あてに『二十四の瞳』の感想文を書き、自分の原稿を見てもらえないかと書きそえる。信州で仕事中の壷井から葉書がとどく。「文学

に師はないものです」とあり、原稿を見ることはことわられる。（注２）秋、その原稿を『二十四の瞳』の版元光文社編集部にもちこむ。『二十四の瞳』の亜流といわれ、出版をことわられる。編集者から、「それでも、何かコツンとしたものがある。書きつづけなさい」というはげましの手紙をもらうが、書いていく気もちはなかった。

年譜にある「春駒」の原稿は、晩年まで母の手もとにあった。

前々回、母が亡くなったあと、宮城教育大学の児童文学を活用した教員養成プログラムの開発をめぐる共同研究の一部として、宮川ひろに関するインタビューにこたえたことを紹介した（中地文・大木葉子「宮川ひろの児童文学と教育―宮川健郎氏に聞く―」『宮城教育大学紀要』2021 年 1 月参照）。インタビューのなかで、「春駒」の原稿の話をしたことから、宮城教育大学のチームが原稿を調査してくれることになった。

ところが、2021（令和３）年９月にわが家で調査をはじめたところ、約 200 枚という原稿のうち、書き出しから 133 枚めまでしか原稿がないことが判明した。調査は、まず、その 133 枚からはじまったのだが、翌年になって、そのつづきの原稿が発見されたというわけである。原稿は、あわせて 182 枚になったが、これで作品全体でないこともわかった。原稿の冒頭には、梗概と目次がかかげられている。目次には、全９章のタイトルとページが記されているが、いま手もとにある原稿は、第１章から第５章（ただし、おしまいの２ページが欠落）、第８章、第９章である。

原稿の調査は、すでに終了し、中地文・大木葉子「宮川ひろの未発表作品「春駒」について―解題と本文紹介（一）～（三）―」（『宮城教育大学紀要』2023 年 1 月、23 年 3 月、24 年 3 月）として発表されている。現存原稿の本文すべてを読むことができ、推敲過程もつぶさに明らかにされている。

宮川ひろのこれから

「春駒」の第 1 章のタイトルは「春駒」、書き出しはこうだ。

小さな村を囲む重なり合った山々の木立は未だかたくその芽を閉じたままだけれどその梢は寒風と闘って来たうなりを静めて、落葉の下に隠された山肌はしっとりとぬれていたし部落の家並を二つに分けて流れる谷川の水も濁って水量を増し流れに添った街道も知らぬ間に乾いて自然も人も救はれた様にホット歎息しているのかと思はれる物静な午後。それは昭和四年の四月の声を聞いたばかりの暖かい日だった。（引用は中地文他「宮川ひろの未発表作品「春駒」について―解題と本文紹介（一）―」前掲による）。

少し古風な小説の文章である。センテンスが長い。母が短いセンテンスで書いていく児童文学の文体を獲得したのは、まだ先のことだとわかる。冒頭に「昭和三年四月四日、農山漁村の名が全部あてはまるような、瀬戸内海べりの一寒村へ、若い女の先生が赴任してきた。」という一節のある壷井栄『二十四の瞳』（光文社 1952 年、引用は岩波文庫 2018 年による）を連想させる。

「春駒」の舞台は「冬の長い上越国境の山村」で、主人公は「就学までには未だ一年間ある数え年七才」の雪子だ。母の自伝的な長編である。小学４年生に進級し

た兄の名前は、やはり貞治で、第８章で出征し、「北支戦線」で戦死する。第１章で春駒の太鼓の音が聞こえて、貞兄と雪子は、家を飛び出す。

中地文他「宮川ひろの未発表作品「春駒」について―解題と本文紹介（三）―」（前掲）の最後には、「「春駒」と宮川ひろの児童文学」の章があり、さまざまな問題が整理されている。「春駒」のはじめの 133 枚とおしまいの 49 枚が別々にちがう状態で保管されていたことについても考察がある。

早い時期に書かれた、この「春駒」、同人雑誌『どうわ教室』創刊号（1966 年 4 月）に発表された短編「春駒」、『春駒のうた』（偕成社 1971 年）、そして、雑誌『びわの実ノート』に連載された（第 6～12 号、1998 年 11 月～2000 年 11 月）「おとっつあん」など、ふるさとの村を舞台とする母の自伝的な作品の系譜について、私も、あらためて考えてみたい。

さて、ダンボール箱のもう一つの原稿は、学童疎開の記録だ。はじめに目次がかかげられているが、敗戦までの出来事がかなり細かい章立てで記されている。最後の章は「終戦後」で、「廃校」「新しい教育」「食生活」「進学」「修学旅行」の節がある。目次のつぎの「まえがき」は、こうはじまる。

> 私は戦争の末期を東京都蒲田区出雲国民学校に戦後の四年間余りを東京都中央区の明石小学校に子供と一緒の生活をして参りましたのであの混乱を極めた時代の思い出を子供達とお話する様な気持で書き記して見ました。

「子供達とお話する様な気持で」とあるが、こんな一節もある。

> 学業は全く放棄された時代に育つてきたのですから社会の先輩に比べたら学力は劣っているに違いありませんが徒に劣等感を抱く様なことがあつてはいけません、真面目に一日も早く先輩のレベルまで追いつく様に努力して下さい。それは生やさしい事ではないでしょうがあの戦争の苦しみの中で育つてきたあなた方はどれ程の苦痛でもじつと堪えていけるという自信が持てる筈です。

この原稿は、いったい、いつ書かれたのか。「まえがき」の記述から、母がもう小学校を退職したあとであることはわかる。退職は、1950（昭和 25）年 12 月 31 日付だから、51 年、52 年あたりか。53 年には、「春駒」を書いている。

実は、まだ、この学童疎開の記録は、スキャンして PDF ファイルにしていく作業の途中だ。作業をなるべく早くおわらせて、文字起こしをするようにしたい。そして、できれば、１冊の本として刊行したいと願っている。

こうしたことが「宮川ひろのこれから」である。

（第４章「宮川ひろ」おわり）

（注）

１、このレストランの開店までのことが、宮川ひろ『おばあさんのつうしんぼ』（偕成社 1987 年、小野かおる絵）の素材になっている。

２、1954（昭和 29）年８月９日に長野県の湯田中で投函された壷井栄の葉書は、母が大切に保管していて、いまも、わが家にある。

（付記） 宮川健郎「宮川ひろという人」(『月刊子どもの本棚』2019 年 6 月)、宮川健郎「命を励ますことば――『「へてか　へねかめ」おふろでね』の刊行によせて」(『母のひろば』2019 年 11 月）と内容が重複するところがあることをおことわりします。

第４章「宮川ひろ」関連年表

1923（大正 12）年　3 月 15 日、群馬県利根郡東村大字千鳥に生まれる。旧姓井上ひろ。
1936（昭和 11）年　5 月、母きん没。
1939（昭和 14）年　2 月、東村小学校高等科を卒業して入学した群馬県立女子師範学校を体調不良による休学ののち退学。4 月、上京して、蒲田区の金華学園正教員保母養成所に入学。この年から、いくつかの府県で尋常小学校本科正教員検定試験を受験。
1940（昭和 15）年　3 月、金華学園卒業。東村小学校本校などで代用教員をつとめる。
1941（昭和 16）年　7 月、兄貞治出征。宇都宮の師団に入営。
1942（昭和 17）年　7 月、正教員免許取得（東京府）。
1943（昭和 18）年　4 月、東京府蒲田区出雲小学校に赴任。
1944（昭和 19）年　8 月、疎開学童を引率して、静岡県磐田郡へ。9 月、兄貞治、ニューブリテン島で戦死との公報とどく。
1945（昭和 20）年　2 月、父朝壽没。3 月、長兄佐一没。6 月、秋田県仙北郡へ再疎開。8 月 15 日、敗戦。
1946（昭和 21）年　4 月、京橋区明石小学校に赴任。
1950（昭和 25）年　12 月、宮川健三郎と結婚。退職。
1953（昭和 28）年　前年 12 月に刊行された壷井栄『二十四の瞳』（光文社）に触発されて、原稿用紙約 200 枚の「春駒」を書く。
1955（昭和 30）年　8 月 3 日、長男健郎誕生。
1958（昭和 33）年　暮れ、夫の事業が倒産。翌年、転居。
1963（昭和 38）年　6 月、「子どもをめぐる文化教室」に参加、坪田譲治先生に出会う。
1965（昭和 40）年　5 月、日本児童文学者協会主催「新日本童話教室」第 2 期を受講。
1966（昭和 41）年　4 月、あまんきみこらと同人雑誌『どうわ教室』（土曜会）創刊。5 月、「たからもの」がはじめて『びわの実学校』第 16 号に掲載される。
1969（昭和 44）年　10 月、『るすばん先生』（ポプラ社）
1970（昭和 45）年　4 月、「地図のある手紙」（『びわの実学校』第 40 号）
1971（昭和 46）年　3 月、『春駒のうた』（偕成社）
1976（昭和 51）年　2 月、『先生のつうしんぼ』（偕成社）
1978（昭和 53）年　3 月、『夜のかげぼうし』（講談社、赤い鳥文学賞）
1981（昭和 56）年　3 月 8 日、夫健三郎没。67 歳
1982（昭和 57）年　7 月、『びゅんびゅんごまがまわったら』（林明子絵、童心社）
1985（昭和 60）年　7 月、『東京へ帰る日まで』（講談社）
1989（平成元）年　12 月、『桂子は風のなかで』（岩崎書店、日本児童文学者協会賞）
1993（平成 5）年　12 月、エッセイ集『母からゆずられた前かけ』（文溪堂）
1996（平成 8）年　7 月、『天使のいる教室』（童心社）
2018（平成 30）年　12 月 29 日、95 歳で永眠。
2019（令和元）年　10 月、『「へてか　へてかめ」おふろでね』（ましませつこ絵、童心社）